



# 希望という名の



別句通 〈bekkutooru〉

夏日のかげろうで蜃気楼のようにゆらゆら揺れるディーゼルカーが二本の鉄路の上から滑り落ちそうなのを必死に踏ん張ってこらえているかに見える。

そんなたった1両だけの列車が申し訳程度に草むらにコンクリートを盛ったようなプラットホームを持つ、変哲のない無人駅に着いた。周囲は草むらや枯れ木の目立つ雑木林である。

「ふぁ〜、やっと着いたー」1両だけの列車から1人の男盛りの少し腹回りに肉の付いた男性が降り立った。

「着いたね」後から1人の少年がぼつりとそう言った。まだ性の別もつかないようなあどけない顔は暑さと陽のまぶしさでやや顔をしかめていた。細い腕の先の小さな掌はしっかりと携帯ゲーム機をつかんでいた。

「ここがお前の駅だぞ、希望（きぼう）ー」男が白と黒のペンキでしつらえた、錆でくすんだ駅名標識を指差した。大きなひらがなと小さな漢字で書かれていた。

「ここがー」しかし少年には特に何の感慨もないといった風であった。

「お前の名前はこの駅からとったのさ。希望。今は無いけどこの近くにあったユースホステルで母さんと知り合ってー」「そうなんだね」

希望という名の少年はたぶん何十回とくりかえされているのであろう母と父のなれそめを別にうんざりするでもなく耳に流すのだった。

ところでその無人駅である『希望』駅には先客が少なからずいた。いずれも単身で乗り込んできたと思われる若い男ばかりだ。たいていが少し写りのよさそうな重たげなカメラを肩からかけ、ある者はベンチに腰掛けコンビニの握り飯をほおぼり、またある者は駅の周りをくまなくレンズにおさめていた。

「残念だなあ。こんな素晴らしい線が廃止されるなんて」希望少年の父親らしい男は独白のようにぼそつと言った。しかし希望君はそんな父の述懐に気も留めず愛機を片手にお気に入りの色鮮やかなパズルゲームに興じている。そもそも、こんな変哲のない僻地にこの駅名は何かの皮肉であろうか。

いや、たしかに戦後まもなく農地開拓のための入植が始まったときにつけられたこの駅周辺の地区名なのである。時代は一次産業から二次産業に変わり、そして今、この駅は廃線のカウントダウンが始まってから、その終焉の名残を胸に刻みつけようと鄙には稀なというべき多くの人々が訪れてきていたのだった。

「せっかく来たんだから2人で写真撮ろう」父は担いでいたショルダーバッグから小さなデジカメを出した。そしてシャッター係を指名するために、広くもない単線用のプラットホームにいる数名の先客たちを物色しはじめた。しかし、どいつも自己の世界に没頭していそうなオーラをぶ

んぷん放ち、容易に声をかけづらかった。「うーむ」

「お父さん、僕がとってあげるけど」若干気の小さい父を忖度した孝行息子は父にそう話かけた。「よし、じゃあお前からとってやるよ」

「ふざけんなよー！」「テメエこそ！」親子のさみしいやり取りを中座するように小さなホーム上の待合所から若い男たちの怒号がとびかった。

スワ、事件とばかりに希望親子は現場の確認に待合所へ足を向けた。その壁には、くすみかかった印刷のアニメ風美少女キャラがあしらわれた大きなポスターが貼ってあった。「このレアモノは俺が先にゲットしようと思ってたんだ」「いいや俺だ」

2人とも少し脂ぎって地味な服装の若い男だった。彼らのやりとりを見て希望父は、「ははーん。このポスターはこの町がつくった萌えキャラで、たしか名前は...」

「きぼにゃん！」言い争っていた男たちは声を合わせて希望親子に向かって言い放った。

「お兄さんたち、そんなことでけんかしなくてもいいでしょ？」希望君が男たちを仲裁するかのようになら近づいて行ったが、一人のほうが、「うるせえんだよ！」と言って小さな希望君をつきとばした。

まだまだ筋肉の少ない子供の希望君は脂ぎった男につきとばされた勢いで、彼らからそれほど間隔のないホームの端までよろけ、はずみで遂に線路に落ちてしまった。

しかしこんな不運なこともあるのか、希望親子が乗ってきた列車とは逆方向の列車が運悪くけたたましい汽笛を鳴らしつつ断末魔のようなブレーキ音を響かせ入線してきた。2本の線路の間に倒れこんだ希望少年は助けを叫ぶ間もなくディーゼルカーに喰られるかのようにその下に隠されてしまった。

「や、やばい〜」突き飛ばした男は狼狽して立ち尽くした。他の客たちも惨事に野次馬よろしく一斉に希望少年の安否を求めに来た。

「き、希望ー！！」父はほうほうのていで希望が落ちたであろう位置の列車とホームの隙間を覗き込んだ。突き飛ばした男もうなだれて何かをぶつぶつぶやきながらへたり込んだ。他の野次馬たちは無神経にも携帯を車両とホームとの隙間や希望父や突き飛ばした男に向けた。

“事件現場なう”“悲痛な親父の姿”“犯人がコイツ”などとコメントを打って即急にめいめいが各種のサイトに写真を投稿した。

「俺の、おれの希望が死んだ....」

しかし、そう言うや否や「おとうさーん！無事だよー。一応」列車の下から希望君の声がした。

「希望ー！生きているのか！」父はありったけの声を列車の下に向け放った。

そのとき列車が汽笛を上げ、来た方向をゆっくりと逆走した。列車がどいてみると、はたして希望君は無傷だった。二本の線路の間にある枕木を割り砂利を押しつけて自分のぶんのサバイバルスペースを確保していたのだった。

それを見ていた野次馬の一人が「廃線間際で予算もないから枕木が朽ちていたんだな」などと納得していた。「火事場の馬鹿力もあったんだろ」別の者がそういった。

「希望、よかった」父がそう言ってホームから手を差し出すと、希望君はにっこりほほ笑んだ。そして立ち上がろうとしたが、めまいに襲われたような虚ろな表情になって、あらためて倒れこんでしまった。

「希望！しっかりしろ！」

後日のニュースで沿線の工場による化学物質が原因で、沿線の木や草が枯れている事象が多く報告された。了

## 希望という名の

<http://p.booklog.jp/book/76062>

著者：別句通〈bekkutooru〉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile>

\*本作品はフィクションです。実際の人物・団体・事象等とは一切関係がありません。

\*本作品の著作権はGK CIRCUIT LIMITEDが保有しております。

\*本作品の2次利用は無償とします。ご利用される方は[mail@gkccircuit.com](mailto:mail@gkccircuit.com)か

若しくは<https://twitter.com/bekkutooru>

にツイート等してご一報下さい

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76062>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76062>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ